



変わりゆく常識

抱っこの仕方

昔は『抱き癖がつく』と良く言われましたが、現在ではたくさん抱っこしてあげる子育てが推奨されています。

抱っこって甘やかしのの？

本来、抱っこというものは決して甘やかしではありません。親と子の大事な「スキンシップ」であり、親やまわりの大人からの愛情をたっぷり感じられる手段です。抱っこする側からしても子どもを抱っこしている時は幸せな時間です。

そもそも「甘やかし」というのは、例えば何かの玩具などを欲しいと言われてすぐに買ってあげる…というような行為のことであって、子どもがどうしてもできないことに手を貸してあげることや、抱っこのように子どもの『情緒的な欲求』に応えてあげることが決して甘やかしではありません。

子どもが求めてきたらたつぷりと抱っこをしてあげて安心でつむことが大事です。

抱っこをすると良いことがある

特に赤ちゃんは抱っこしてもらいうことで安心感や信頼感を覚え、情緒が安定します。また、他の発達なさざまな面でもよい影響を及ぼすことが、近年の研究によりわかっていきます。抱っこを求めているのは赤ちゃんが健全に発達している証拠なので、何も心配せずにたくさん抱っこをしていくべきなのです。

子どもにとって「抱っこされて、その人の温もりを感じる」というのは何よりも安心するものです。抱っこを求めた時にそれに応じてもらう…という経験を重ねること、子どもは精神的にも安定します。

抱っこは何歳まで？

忙しい時は「ちよつと待っていてね。」と声をかけて、落ち着いた時に必ず抱っこしてあげるようにすれば、子どもは安心して基本的信頼感を身につけます。

結論から言うと『子どもが求めるのであれば何歳まででもOK』です。赤ちゃんでもないのに…と思うかも知れませんが、求めてきた時にはしっかりと抱っこして子どもを安心させてあげましょう。もちろん、こども園でも求められれば惜しみなく愛情を注いでいます。「あなたのことが大好き！」「どんなあなたも大好きよ♡」と思いを込めて。



※基本的信頼感…大切に養育してくれて愛情や甘えの欲求を受容してくれる養育者への信頼感を通して、自分という存在を肯定的にとらえ、外界は信頼できるものだという感覚をもつこと。

※参考記事 H1060141ナナちゃん など

倉橋惣三の言葉

ろへんみ 炉辺味

冬の日が近づく。

外の寒さと荒涼につけても、

しのばれるのは田舎家などの炉辺ろへんの

味である。ただ暖かいというばかり

ではない。

そこには、意識されない親しさがあ、り、なごやかさがあ、り、ふくよかさがあ、る。

誰を中心ということもなきまどい、

何の用件ということもない話し合い、

それでいて、こつくりとした濃やかさが、

浮きもせず

沈みもしない

ほんとうの

中味をなして

いる。



倉橋惣三(1882-1955)

「日本のフレイベル」あるいは「日本の幼児教育の父」と呼ばれる幼児教育学者。倉橋が展開した子どもの心に徹底的に寄り添い、子どもの遊びや自発性を重視した幼児教育論は、まさしく現代に通じるもの。誘導保育論が特に有名である。

